

Humphreys Chapter II Exercises

解答例 (2023/11/13 実施分)

高間俊至

2025 年 3 月 6 日

[1, p.24, Exercise 1, 2] の解答例です.

何の断りもない場合, 体 \mathbb{K} は代数閉体でかつ $\text{char } \mathbb{K} = 0$ であるとする. また, \mathfrak{g} は零でない体 \mathbb{K} 上の有限次元 Lie 代数とする.

【問題 5.1】 p.24 の Exercise 1

Lie 代数 \mathfrak{g} が冪零 Lie 代数 $\implies \mathfrak{g}$ の Killing 形式が恒等的に 0

証明 \mathfrak{g} が冪零 Lie 代数であるとする. このとき第 1 回資料の命題 1.1.4-(5) より, 部分 Lie 代数 $\text{Im ad} \subset \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の任意の元 $\text{ad}(x) \in \text{Im ad}$ は冪零である. 従って Im ad に対して Corollary 3.3 [1, p.13] を使うことができ, $\forall \text{ad}(x) \in \text{Im ad}$ の表現行列を同時に $n(\dim \mathfrak{g}, \mathbb{K})$ の元 (i.e. 対角成分が全て 0 であるような上三角行列) にするような \mathfrak{g} の基底が存在する. この基底の下では, $\forall \text{ad}(x), \text{ad}(y) \in \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ に対して $\text{ad}(x) \circ \text{ad}(y)$ の表現行列も $n(\dim \mathfrak{g}, \mathbb{K})$ の元になるので $\text{Tr}(\text{ad}(x) \circ \text{ad}(y)) = 0$ が言えた. ■

【問題 5.2】 p.24 の Exercise 2

Lie 代数 \mathfrak{g} およびその Killing 形式

$$\kappa: \mathfrak{g} \times \mathfrak{g} \longrightarrow \mathbb{K}, (x, y) \longmapsto \text{Tr}(\text{ad}(x) \circ \text{ad}(y))$$

を与える. このとき以下の 2 つは同値である^a:

- (1) \mathfrak{g} が可解
- (2)

$$[\mathfrak{g}, \mathfrak{g}] \subset \{x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \kappa(x, y) = 0\}$$

^a $\{x \in \mathfrak{g} \mid \forall y \in \mathfrak{g}, \kappa(x, y) = 0\}$ を κ の **radical** と呼ぶのだった.

証明 (1) \implies (2)

\mathfrak{g} が可解であるとする. このとき第 1 回資料の命題 1.1.3-(1) より, Lie 代数の準同型 $\text{ad}: \mathfrak{g} \longrightarrow \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の像 $\text{Im ad} \subset \mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ もまた可解な部分 Lie 代数である. よって Lie の定理 [1, p.16, Corollary A] から, $\forall \text{ad}(x) \in \text{Im ad}$ の表現行列を同時に $t(\dim \mathfrak{g}, \mathbb{K})$ の元 (i.e. 上三角行列) にするような \mathfrak{g} の基底が存

在する。以下、 \mathfrak{g} の基底をこの特別な基底に固定する。

$[x, y]$ の形をした任意の $[\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$ の元をとる。このとき $\mathrm{ad}([x, y]) = [\mathrm{ad}(x), \mathrm{ad}(y)] = \mathrm{ad}(x) \circ \mathrm{ad}(y) - \mathrm{ad}(y) \circ \mathrm{ad}(x)$ が成り立つ^{*1}が、今の基底の下では $\mathrm{ad}(x), \mathrm{ad}(y)$ の表現行列が上三角行列なので $\mathrm{ad}([x, y])$ の表現行列は $\mathfrak{n}(\dim \mathfrak{g}, \mathbb{K})$ の元 (i.e. 対角成分が全て 0 であるような上三角行列) になる。このとき $\forall z \in \mathfrak{g}$ に対して^{*2} $\mathrm{ad}([x, y]) \circ \mathrm{ad}(z)$ の表現行列もまた $\mathfrak{n}(\dim \mathfrak{g}, \mathbb{K})$ の元になるので $\kappa([x, y], z) = \mathrm{Tr}(\mathrm{ad}([x, y]) \circ \mathrm{ad}(z)) = 0$ が言える。 $[\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$ が $[x, y]$ の形をした元によって生成されること、および κ が双線型写像であることから証明が完了した。

(1) \Longleftarrow (2)

Corollary [1, p.20] そのものである。

■

参考文献

[1] J. E. Humphreys, *Introduction to Lie algebras and representation theory* (Springer, 1972).

^{*1} ad は Lie 代数の準同型なので、 $\mathfrak{gl}(\mathfrak{g})$ の Lie ブラケットは交換子だったことを思い出すと良い。

^{*2} \mathfrak{g} の基底の取り方から $\mathrm{ad}(z) \in \mathrm{Im} \, \mathrm{ad}$ の表現行列もまた上三角行列である。